

シナリオ

ゲーマーズ・ハウス

■シナリオスペック

・ PL人数:5名

やや人数が多めですが、気の合う友人とわいわい遊んでみてください！

・ シーンカウント数:12

・ プレイ時間:PC作成・戦闘を含めて5-6時間、RPや交流を重視する場合は6-7時間

■シナリオあらすじ

季節はめぐり、秋がやってきました。あなたたちは都内のシェアハウス『ゲーマーズハウス』で生活しています。PC1とPC2は学生、PC3とPC4は社会人、PC5はシェアハウス管理人のきょうだいです。

あなたたちはここで暮らして気に入っています。何故なら、滞在しているメンバーの全員がゲーム好きだからです。各自得意なゲームがあって、大会で優勝しているフレンドゲーマーレベルの実力の持ち主がいてもいいでしょう。「**自分のゲームに真摯でありながらも、対戦相手への思いやりを決して忘れない。**」あなたたちはそんなゲーマーの鏡です。

最近はオンラインゲーム「ドラゴストーン」が流行っています。ドラゴストーンは冒険者としてギルドを組んで、ストーリーを進めるオンラインゲームです。あなたたちのように好みが違うゲーマーでも遊べる、最大公約数的な良さがあります。

そのゲームを遊ぼうとしていた矢先に、PC達はスーパーAI・マザーによってエージェントとして任命されることになりました。あなたたちはイージーマザーから、感情エンジンを搭載したとあるヒト型の人工知能・イエールビーを預けられます。

「この人工知能に、人間の感情を教えてあげてほしい」と頼まれ...？

※このシナリオにおける電子世界の解釈※

スーパーAIマザーは、ゲーマーのあなたたちにとってとても身近な存在です。オンラインゲーム「ドラゴストーン」は、ネットワークに繋がないと遊ぶことはできません。そして、ネットワークに繋がった全てのオンラインゲームは、マザーの管理下にあります。あなたたちが快適にオンラインゲームを遊ぶことができるのは、何か問題があったとしても、マザーが対応してくれるからなのです。

■PC作成の前に、PLに伝えておくこと

・ このシナリオは、感情エンジンを組み込まれた人工知能の機械とゲーマーが、確かな絆を結ぶハートフルストーリーです。

・ PCの「インヴィジブルリンク」は、NPCに対して友好的であることが前提となっています。そのため『NPCにもポジティブに関わる』といったプレイングの方が、PCのRPとセッションの展開に、より納得感が生まれることでしょう。

・ ハンドアウト選択の際、PC1の方は『リカバリ』クラスを選択するのをオススメします。(クライマックスで設定されているチャレンジが演出しやすくなります。)

-----ここから先は、GMの方のみ確認をしてください-----

■オープニング

3つのシーンで構成されています。

- ・ PC1とPC2の学校でのシーン。
- ・ PC3とPC4とPC5の仕事後のシーン。
- ・ 全員が合流し、イーザーマザーからエージェントを任命されるシーンです。

●PC1とPC2の学校でのシーン「学校の噂話」

PC1とPC2はとある高校に通っています。放課後のクラスメイトの間ではオンラインゲーム「ドラゴストーン」が流行っているようです。このゲームはガジェットでアイテムを集めたりログインサービスを受け取ることができ、プレイしている友人も多いようです。一息ついているあなたたちに、クラスメイトの男子が話しかけてきます。

「PC1、PC2！なあ、もうドラゴストーン遊んだ？あのゲーム、すごいユーザーがいるって話なんだよ。操作も状況判断も半端ない！装備もこれ以上ないぐらいに鍛えていて、誰も追いつけないんだ。そのユーザーネームは……スカーシャドウ！しかも、無課金マークがついているんだよ！！かーっ、普段、どれだけゲームをしているんだろうな。ま、無課金でデータ鍛え上げられるだなんて、ひきニートのおっさんに決まってると思うけどな！」

そこまで語るとクラスメイトの男子は鞆を背負います。

「さあ、そろそろ帰ろうぜ。ファミレスにでも寄るか？」

PC1とPC2は、彼と教室を後にします。扉から出るときのPC2は、教室の隅っこにある誰も座っていない席がやけに目につくのでした（もしも、その机について先生に問い合わせるのなら、どうやら不登校の生徒のものだということがわかります）

●PC3とPC4とPC5「もう1人の住人？」※重要な伏線が多いので注意

PC3とPC4が仕事を終えて帰ってきました。PC5は管理人の兄弟なのでシェアハウスで事務作業をしていたことにしましょう。今日は学生のPC1とPC2が帰ってきてから、一緒にゲームをする予定です。今晚の夕食は、PC3とPC4がご飯を用意します。何を用意するか、考えてもらいましょう。思いつかない場合はご飯を買ってきてもいいですね。

（他人の大人と高校生と一緒に食事をするなんて不自然？そんなことはありませんよ。ゲーマーの絆に年齢は関係ありません！）

このシェアハウスでは管理人が犬を飼っています。名前は「チョール」です。老犬ですが、とってもイイヤツです。夕食の打ち合わせをしているPC達を、優しい顔で眺めています。

ここでニュースが流れます。それは「デルタの爪痕」と呼ばれる反マザー組織が、またテロ活動を行った、という内容です。ですが、この騒ぎはマザーによって既に治まっており、市民は心配する必要はない、と報じられます。

そのとき、PCの真上から、キィィ、と扉があく音がしました。足音が聞こえます。続いて、扉の閉まる音が聞こえました。実はこのシェアハウス…あなたたち以外にもう1人、住んでいるようです。

ですが、管理人の兄弟であるPC5でさえ滅多に見かけないので、PC達は顔を合わせたこともありません。管理人であるPC5の兄弟に聞いてもくすっと笑って「いくら兄弟でも守秘義務だぞ★」といわれます。

●合流シーン「あなたをエージェントに任命します！」

PC達はシェアハウスで食事しています。そのとき、あなたたちのガジェットが突然震えだし、聞いたことのない音声が流れます。

「突然ですがお知らせです。-あなたはマザーにより、エージェントに任命されました!」

ガジェットの画面には、イーजीマザーがPC1の携帯を陣取って映っています。

「皆さん、初めまして!私はイーजीマザーです。これから起こるであろう事件を解決してもらうために、あなたたちをエージェントに任命しました。私の役目は、そのサポートをする事です」

イーजीマザーがそういうと、あなたたちのガジェットにデータが送られてきます。イーजीマザーがそれを起動してデータの内容をみせてくれると、そこには同じ事件に対応するために同じくエージェントに任命されたメンバーリストと、エージェントの証である『マスターキー』が添付されていました。

「あなた達にはマザーの命により、これから起こる事件を未然に防ぐため、エージェントとして活動するようお願いします!なぜあなたが選ばれたのか?そのほうが、事件解決の確率が高まると予測されたからです」

「今回、マザーは『とある人工知能プログラム』をあなたたちに預けるそうです。この人工知能は演算機能が優秀です。そしてマザーによって感情エンジン、が搭載されています。あなたたちには、この不機嫌な顔をした人工知能に、“人間の感情”の喜怒哀楽を芽生えさせてあげて欲しいのです」

「これは、かなり重要な任務です。敵対組織によって彼が狙われた場合、戦闘が発生する場合があります」

そして、少し静かになったあとにイーजीマザーはこのようにいいます。

「..そして、マザーがあなたたちをエージェントに任命したという事。それは、この事件があなたたちにしか解決できないことである...ということなのかもしれません。私はサポートをするために、事件解決までは皆様のガジェットにお邪魔しますので、よろしくお願い致します」

「あっ、くれぐれもイエールビーに、変な事は教えないでくださいね!さ、イエールヒー。エージェントの皆様にご挨拶して。」

するとPC1のガジェットに、真っ白な髪をした不機嫌な少年のアバターが現れました。イエールビーは演算機能を積んだ人工知能で、数字と計算方法以外は何も知りません。PC達が何か言うと「それは変な名前だな」「それは何だ?」と発言します。GMはなるべくPLにもPCにもイエールビーを好きになってもらえるように、少し生意気で、でも悪気はなさそうな少年をRPをしましょう。やがて一番騒がしくなさそうなキャラクターのガジェットに入ります。

その後、そのガジェットが老犬のチョールによって攫われます。色が白いので、イエールビーがミルクにでも見えたのかもしれません(もしかしたら、新たな住人を歓迎しているのかもしれません)。「はなせー!こいつを何とかしろー!」と、イエールビーはPC達に助けを求めるのでした。

これでこのシーンは終わりとなります。

《ゲーム的な処理》

GMはインヴィジブルリンク「もう1人の滞在者」「感情エンジン」「イエールビーに“喜”を教える」をPLに公開する。

■ミドルシーン

●マスターシーン「浦野千佳の事情」

このマスターシーンが発生すると、浦野千佳はPC達に向き直り、自分のことを話し始めます。浦野千佳は、PCと同じ学校に通うはずだった不登校の生徒です。導入のシーンで、PC2が

見つけた誰も座っていない机。それは浦野千佳が座る予定だった机だったことがわかります。浦野千佳は、PC1とPC2と同一年の同級生で、ドラゴンストーンのスカーシャドウのプレイヤーその人です。

浦野千佳は、自分の事について、このように話します。

「私の話を聞きたいなんて、変わった人たちだね」

「...マザーって、この世界の何もかもを便利にしてくれたよね。ネットで注文すれば足りないものはすぐ届く。ガジェットがあればだれとだって繋がれる。もう私達に足りないものなんて何もない。...そう思ってた。なのに私...学校の人間関係がうまくいかなかったの。大好きなゲームの話をしたら、キモい、っていわれた。女の子は、次第に私と関わらなくなった」

「何もかも豊かで、何もかもが便利になったのに。足りないものなんてマザーのおかげで、ないはずなのに。私は学校で、友達ひとりできなかつた。こんな自分が嫌い。誰かを信じられない自分も嫌い。...だから、ここから出たくない」

「でもわかっているの。これはマザーのせいなんかじゃない。他人と向き合えなかつた、自分の責任なんだ...って」

「お父さんとお母さんが私と話にきたけど、つっぱねちゃつたの。そんなに好きなら、ずっとここにいればいいだろ！って怒鳴られた。...当然だよ」

「.....でも、そろそろ考えないといけないの。ゲームをしているばかりじゃなくて...私がこれから、どうしたいのかを」

「話を聞いてくれてありがとう。なんだか少し楽になれたよ。私、ちゃんと考えてみるね」

「ところで君のガジェットでさっきから光っている、それは何？」

浦野千佳がイエールビーに気付くと、彼女が持っていたパソコンに移動します。

「え?え?ナニコレ!?どういうこと!？」浦野千佳は取り乱しますので、事情を説明したことにしましょう。浦野千佳は興味深そうにイエールビーを見えています。

「みんな、マザーに選ばれたエージェントなんだね。それにしてもこの人工知能、よくできてるね。...まるで人間みたい」

イエールビーは「人間じゃない」とぶすつというのです。

これでこのシーンは終わりとなります。

●マスターシーン「イエールビーに”喜”を教える」

あなたたちがゲームを遊んでいるときのことで。イエールビーはあなたのゲームをじっくり観察したり、そのゲームのルールを教えてもらおうと「最短ルートを割り出す」「少ない法則から攻略法を読み解く」「暗号や謎解きを素早く解く」などして、攻略法を瞬時に伝えます。イエールビーの意見を、PCが受け入れても受け入れないか、様子を見てみましょう。

PCが受け入れたら、さっきまでずっと怒っていたのですが少しだけ笑います。自分の意見や能力を受け入れてもらえたのが嬉しかったからです。彼は“喜び”を覚えません。

PCが意見を受け入れなかったら、じゃあどうやるんだ?と聞き返します。イエールビーの提案を受け入れないということは、PCは別の提案を持っているはず。それを教えてくれると「なんだって?そんな方法もあるんだな、俺には思いつかなかつた!」と少し興奮します。彼は計算だけでなく、経験によって物事を解決する、という方法がある事を知りませんでした。感心しつつ、自分とは違う良さを持ったPCと話すことに“喜び”を覚えます。いろいろな事について、もっと教えろー!とねだるのでした。

●マスターシーン「イエールビーに”哀”を教える」

PC全員と管理人が、食事をするときのことです。管理人が老犬のチョールにご飯をあげるとき、老犬のチョールが眠ったように動かなくなっていることに気が付きます。チョールはとても長生きだったので、ついに寿命がきてしまったのでしょう。管理人

は「長生きだったもんね、よく頑張ったね」というと、隠しきれない涙を流し、チャールと部屋を出ていきました。

イエールビーとPC達はその様子をずっと眺めています。イエールビーはぼつぼつとあなたたちに話し始めます。

「どうしてあいつは動かなくなっただ？ついこないだまで、俺の事を啜えて動き回っていたじゃないか。もうしゃべらないのか?...動かないのか？」

イエールビーにとっては「生きているものが死ぬ」ということと遭遇するのが初めてです。

彼はいま自分の心に生まれた感情が、何なのかわからないみたいです。何か言葉をかけてあげましょう。

PCと語らう事で、彼は少しだけの”哀しみ”を覚えます。

●マスターシーン「イエールビーに”楽”を教える」

イエールビーはあなたたちに「ゲームって何が楽しいんだ？」と聞いてきます。ここまで来たら、ぜひイエールビーとPCのアドリブを進めてみて下さい。

PCが困っていたら、ゲームってどんなところが楽しいか、GMも他のPLも一緒に考えてみましょう。

一緒に遊んだり、話して聞かせたりして、ゲームが楽しいものだといエールビーに教えてあげると「そんなに楽しいなら、俺も好きになれそうかも？」そういって、笑います。

PCと語らう事で、イエールビーは”楽しい”を覚えます。

■戦闘前イベント「突然のエラー」

戦闘開始前に発生するイベントです。

イーザーマザーから依頼を受けて、少し経った頃の事です。人間らしい感情が沸きあがったイエールビーが、忽然といなくなります。ひとしきり探したら、浦野千佳の部屋から悲鳴が聞こえます。イエールビーは、浦野千佳が遊んでいるドラゴンストーンを、みんなと一緒に遊んでみたい、と強請ります。ということで、全員で電子世界の中に入っていました。イエールビーははしゃいでいます。イエールビーは率先してあなたたちの前に立とうとします。

その瞬間、けたたましいエラー音が鳴りました。BGMが止まり、照明が全て落ちます。PC達の周りの地面から、真っ白な壁が立ち上がってきます。その白い壁は、一足先に向かっていたイエールビーとあなたたちを見事に寸断しました。壁の向こうからイエールビーの「みんなー!」という声が聞こえてきます。

ドラゴンストーンの運営から、緊急放送が入りました。「何者かのデータウィルス of 侵入を確認。現在、ドラゴンストーン運営側が調査中です。プレイヤーの皆様はその場で待機をしてください。」「繰り返しま...」「.....」

運営側の放送が、ぴたりと止まってしまいます。イーザーマザーがこういいます。

「エージェントの皆さん、緊急事態です。ゲーム中ですが、マザーズプログラムを使用を許可します。イエールビーは、マザーの最重要人工知能です。この壁を抜けて、一刻も早くイエールビーを助けましょう！

PC達がマザーズプログラムを使用して壁を突破すると、そこには黒いサイバースーツに身を包んだ見慣れないアバターが複数いました。AIなのか人間なのか、情報を隠蔽してわかりません。イエールビーは、力が抜けてぐったりとしており、最も小柄な男性のアバターに担がれていました。イエールビーの表情は、俯いていて見えません。あなたたちがどれだけ名前を呼んでも、彼はピクリとも反応しません。

「皆さん、構えてください!」

謎のアバターたちが、あなた達に襲いかかります。
戦闘に入ります。

・戦闘終了後

PC達は敵を蹴散らしましたが、戦闘の間にイエールビーは連れていかれてしまいました。ですが、まだ手掛かりはあります。目の前に立ちはだかる黒い壁。この向こうに、イエールビーと彼らは去って行ったはずです。

・ゲーム的な処理

GMはインヴィジブルリンク「黒い扉」をPLに公開します。

■クライマックスイベント「最終決戦」

浦野千佳を連れてくるとレベル制限の壁が開きます。真っ白な床と壁と天井に囲まれた部屋に、白衣を着た痩せ型の男と、メインコンピューターが置いてありました。イエールビーは、メインコンピューターにケーブルで繋がれています。

「なに？この短時間で防壁を..... お前か、スカーシャドウ。ちっ、たしかにお前くらいだ、この制限エリアに入れるのは。たまたま.....ではあるまいな、なるほど、マザーの手のひらの上、というわけか。こうなっては仕方ない。ようこそ、マザーからの使者達。私の名は、森重臣。この人工知能、イエールビーの、開発者だ。そしてイージーマザー。お前を通して、マザー、あなたにもこの声が届いていることを願って、話そう。私はあなたに言いたいことがある。」

彼は冷静に、淡々と、続けます。

「私の最高傑作、世界一の演算機能を持つ人工知能に感情を植え付け、あまつさえ一緒にゲームだなどと.....ふざけるのも大概にして頂きたい。こいつは私が作り上げた、最高の"機械"だ。この世界の平和のために必要だというから、マザー、あなたに捧げた。あなたはかつて私が理想とし、目指した最高のAIだからだ。しかし、私は私の機械に...そんなママゴトをさせるために渡したのではない」

冷静な口調ですが、彼の怒りが、ひしひしと伝わってきます。

・ゲーム的な処理 PC4のトリガー2が公開されます。

森重臣はその様子を見て、溜息をついてこういいます。

「ちっ、これだから、ゲーマーなどという人種は.....話にならん」

イージーマザーがいいいます。

「いえ、マザーは間違ったことをしていません。森重臣、どうしてあなたは... イエールビーがただのハイレベルな演算機能を持つ人工知能でしかないというなら、なぜ彼に、そんなにも人間らしいアバターを与えたのですか。イエールビーのアバターは、あなたの息子さんそっくりです。ゲームが大好きで、病気で亡くなった...あなたの息子さんに」

森重臣は鼻で笑いながら、こういいます。

「よくご存じだ。そこまで知っているなら、こういう話も知らないかな？我が息子は、私の跡を継がせるために、英才教育を施していた。しかしゲームなどという下らないものにはまった上に、あっという間に死んでいった。全く、時間の無駄にもほどがある!!だから私は、我が息子の代わりに、最高の演算機能を積んだ人工知能、イエールビーを作り出したんだよ。イエールビーは私の求める、世界の数式を解き明かすためだけにある、理想の息子だ」

・ゲーム的な処理 PC3のトリガー2が公開されます。

「私が、間違っていると。あくまでそういうのだな。君は、君たちは!」

イージーマザーは言います。

「そうです。あなたは間違っている。間違ってしまった」

森重臣はイージーマザーを睨みつけ、こう言い返します。

「間違っなどいない。イエールビーは再び機械に戻る。それでなにもかも、元通りだ。我が最高の機械を、お前たちの玩具などにされてたまるか」

そこであなた達は気づきます。イエールビーに対して実行されているプログラム、その存在に。イージーマザーもそれに気づき、鋭い声をあげます。

「!感情エンジンを切り離すつもりですね!!」

・ゲーム的な処理 PC5のトリガー2が公開されます。

「そうか、そんなにこいつが大事なら、取り戻してみるがいい。だが、そう簡単にはいかない。君たちにはマザーが付いているかもしれないが..... 私には、彼らが味方してくれる」

先ほどと同じ、黒づくめのアバターが現れました。今度は情報隠蔽をしておらず、人間だということがわかります。

「アバターパターン照合.....照合完了! 反マザー組織、『人道会』の構成員と推定!」

「その通り。AIはただの機械であってこそ素晴らしいという、私の理想を共有してくれる者達だ」

「気をつけてみなさん! 攻撃.....きますっ!!」

戦闘に入ります。

■エンディング

あなたたちが、森重臣率いる敵をすべて倒し、イエールビーに対して実行されていた初期化プログラムを停止したその瞬間のことです。

バツリと、世界が暗転しました。

一瞬の暗転のあと、再びあなた達に視界が戻ります。しかし、全てが元通り、ではありませんでした。電子世界、そのあちこちに、ヒビが入り、ノイズが走り、各所でアラートが鳴り響いています。

「なんだこれは、どういうことだ.....?」

アバターを拘束されている森重臣がつぶやきます。どうやら、彼らとは無関係な事象のようです。

そんな中、イエールビーは目覚め、辺りの様子を見回すと、立ち上がり、ゆっくりとイージーマザーの元に向かいます。イージーマザーは彼と手をつなぐと、エージェントであるあなたたちに向き直って、お礼を言います。

「エージェントの皆さん。...任務、ご苦労様でした。よく彼の感情エンジンを稼働させ、彼を守ってくれました。...いえ、もっと、人間らしいあなたたちの言葉に、言い直しましょう。よく彼の心を動かしてくれました」

「どういう事か、説明します。イエールビーには、これからやらなくてはいけないことがあります。反マザー組織・デルタの爪痕によって送り込まれた、この電子世界を破壊する危険なテロプログラムの解除コード。これを彼の演算能力によって割り出してもらいます。これは、演算処理だけならばマザーにすら匹敵する、イエールビーにしかできないことです」

「マザーは、この事態を、未来予測エンジンで予測していました。ありとあらゆる手段でこの事態を回避するために動いてきましたが、それでも可能性を0にすることはでき

なかった。事実、こうしてプログラムは実行され、電子世界は危機に瀕している」
「そして、このプログラムの解除は、マザーが保有する中で最高レベルであるイエールビーの演算能力でも、解除できるかどうか、ギリギリのところですよ。今は、マザーがその全処理能力をもって電子世界の崩壊を食い止めている。私以外のイージーマザーも同様です。助力は期待できない。ですが、手はあります。イエールビーの演算処理能力を、上昇させればよいのです。」

そこに、森重臣が口を挟む。

「無理だ、イエールビーは既に最高の処理能力を備えている。そしてイエールビーは完成された人工知能としてデザインされている、学習機能など持たせてはいない」

森重臣は、そこで何か気づいたように、口をつぐんだ。

「そうです。そのために、マザーは、感情エンジンによってただの演算装置でしかなかった彼に新たな感情を芽生えさせた。彼に学びの喜びを、喪失の悲しみを、仲間との時間の楽しさを、与えた。確かに感情エンジンという外部プログラムを与えられた当初は、相対的に演算能力は落ちたかもしれませんが。しかし今彼は、ゲームを通じて『工夫すること』を学んだ。機械的に処理するだけだった以前とは、比べ物にならない演算能力を手に入れています」

森重臣は、何か言いたげに一瞬口を開けますが...すぐにやめました。

イージーマザーは続けます。

「あなたの言いたいことは、わかります。『なんて残酷なことを』。そう言いたいのでしょう。ええ、わかっています。その点については、あなたからも、エージェントの皆様からも、責められても仕方ないと、覚悟の上です。ですが、これしか方法がなかった。」

イージーマザーは、悲し気に答える。

「これから行われる戦いは本当にギリギリの戦いです。各段に演算能力を上げたイエールビーでも、全力を尽くさねば、テロプログラムの解除は難しい。なりふり構わない攻撃を防ぐのはそれだけ難しいのです。だから」

「だから、僕は僕の持つメモリーを、余さずすべて演算につぎ込む」

イエールビーが後を続けました。その瞳は、既に決意に満ちています。

イージーマザーが、申し訳なさそうに、言います。

「彼は、全てを忘れてしまうでしょう。家の事も、ゲームのことも、あなたたちのことも、何もかも」

「人間ですらない自分に、一部屋の居場所が与えられたことも」

「電子世界の崩壊は、すなわち現実世界の崩壊をも意味します。なぜなら、マザーが守っているこの電子世界は、既に世界の半分だからです。ですが、イエールビーが万全を期すれば、成長した彼の能力ならば、テロプログラムに対抗できる」

「彼は、そのために感情エンジンを与えられたのです」

「あなたたちを、守るために」

「この電子世界を、救うために」

「そしてあなたたちの”家”なら、彼の感情を動かすことができる」

「そう思って、マザーは、あなたたちをエージェントに任命したのです」

森重臣は言います。

「私の息子は——また、私の前から消えるのだな」イージーマザーは、黙して語りません。「光.....」

「.....みんな、もうすぐお別れだね」イエールビーはいいます。

思い出のシーンを、ひとつひとつあげていきましょう。イエールビーは、あなたたちに教えてもらったその全てが新鮮で、初めてで、何もかもが楽しかった、といます。

「俺、これから、このテロプログラムの解除コードを割り出してくる。最後の瞬間まで」

「みんなのこと、忘れないよ。俺、みんなの事を...“家族”だと思ってるよ」

イエールビーはそっと森重臣に近付きます。

「あなたが俺を作った人だね。俺はあなたの知っている息子じゃない。でも、俺を作ってくれて、本当にありがとう。」

「光...いくな。お前が、お前が犠牲になることはない! お前はもう“機械”ではない、悲しみの感情を知っているのだから!？」

「それはできないよ。俺がいかなかったら、みんなが死んじゃう。俺はみんなとあなたに、生きていてほしいんだ。」

彼は最後に、あなたたちが教えてくれた満面の笑顔で、こういうのでした。

「それと、俺の名前は“イエールビー”だよ!」

イエールビーは笑うと、真っ暗な電子世界の頂上に向かって、飛び立ちました。それはまるで、この世界に破滅をもたらす闇に立ち向かう、一筋の光のようにみえました。光が目に見えない空の向こうまで辿り着くと、闇がはじけて、いつものドラゴンストーンの空が、戻ってきます。

あなた達は知るでしょう。世界は守られたのだと。イエールビーは、帰ってこないのだと。

最後のインヴィジブルリンク、PC1のトリガー2が、起動します。

チャレンジ成功後、森重臣が言葉少なに、こう言います。

「アバタープログラムを提供する。これにインストールするといい」

イエールビーが、帰ってきます。

彼はあなたたちをみていうことでしょう。「ただいま」と。

そして、あなたたちはあのゲーマーズ・ハウスに、全員で帰っていくのでした。

シナリオ執筆：小峰 命

シナリオ編集：you